JSTCT Letter No.94
Japanese Society for Transplantation and Cellular Therapy
一般社団法人 日本造血・免疫細胞療法学会
April 2024

目　次

第46回日本造血・免疫細胞療法学会総会のご報告 …… ii－iv

2024学会年度 社員総会・評議員会　承認・決定事項等のお知らせ …… v－vii

ワーキンググループ新規メンバー募集のお知らせ／二次調査実施のお知らせとご協力のお願い …… viii

JSTCTが“支援”する臨床研究のご紹介 …… ix

看護部会企画「第46回日本造血・免疫細胞療法学会総会を終えて」 …… x

私の選んだ重要論文「日本医科大学　血液内科　山口　博樹 先生」 …… xi

施設紹介「神戸市立医療センター中央市民病院　血液内科」 …… xii

会員の声「大分大学医学部附属病院　血液内科／輸血部　高野　久仁子 先生」 …… xiii

● **2024学会年度分年会費のご納入について**

会員マイページからクレジットカード決済が可能です。クレジットカード決済を利用されない会員の皆様には近日中に払込用紙をお送りいたしますので、今しばらくお待ちください。

● **本学会会員情報へのご登録内容変更につきまして**

ご勤務先の変更等に伴いご住所、メールアドレス等会員登録情報に変更がございましたら、会員マイページよりご変更いただくか、Eメール、FAX等にてお早目に事務局までお知らせください。
→学会HP「登録情報の変更・休会・退会について」

● **ご登録いただいているご住所について**

本学会では、会員の皆様に対する重要書類、学会総会抄録号などはご登録いただいている住所にお送りしています。宛先不明で返送されてしまった場合、それ以上の対応ができなくなるおそれがありますので、ご自身でのご対応をよろしくお願い申し上げます。

● **ご登録いただいているメールアドレスについて**

本学会では、皆様に対する各種ご案内の多くをEメールにて配信しておりますが、昨今、アドレス変更の届出漏れが多く、メールが不達となる会員の方も多数みられます。一定期間、事務局からのメールが届いていない方は、一度、事務局（jstct_office@jstct.or.jp）までお問合せくださいますようお願い申し上げます。

【JSTCT事務局より】

第46回日本造血・免疫細胞療法学会総会のご報告

第46回日本造血・免疫細胞療法学会総会　会長　　谷口　修一
（国家公務員共済組合連合会浜の町病院院長）

2024年3月21日－23日、第46回日本造血・免疫細胞療法学会総会を東京国際フォーラムにて学会本来の完全対面で開催いたしました。私と虎の門病院にとっては、東京オリンピック2020の年に2006年の都立駒込病院坂巻壽先生以来の東京で開催したいと企画した第42回の学会が新型コロナ感染で直前に開催を中止する事態となり、今回はそのリベンジとなりました。オンラインやハイブリッドと言われる過去に経験しなかった学会を東京（田中淳司会長）、横浜（高橋聡会長）で経験しました。お二人の会長とも、初めての経験で準備大変だったことと思います。この2023年2月の名古屋での学会（赤塚美樹会長）では、多くの先生方が参加され、ほぼ完全にコロナ前の学会が復活した感があり、全国の仲間との再会を楽しむ本来の学会の姿に戻った喜びも味わうことができました。

今回は、私の異動の関係で、虎の門病院と浜の町病院での共同での学会企画ということで主にはメールとオンライン会議で議論を進めてきました。学会のタイトルは前回に引き続き、「生きたいに応える責任」として、「今、再び問う」としました。我々の領域では多数の新規薬剤やCAR-T療法などの新しい治療法が出てきて、一見華やかとなりましたが、再発や寛解導入不応に苦しむ患者とその主治医たちにとって治癒をめざすことが、より楽観的になったとも思えません。造血細胞移植がその最後の砦であることは、今も昔も変わらず、我々の責任は重く肩にのしかかっています。その苦しみを皆で共有し、一人でも患者を救命しようという思いで考えたものです。

学会初日、会場に入ると大きな「昇る金星」の学会ポスターがホールに吊り下げられており（写真1）、かなりの存在感もあり、感慨深いものがありました。これも第42回総会のときと同じく、旧友の写真家、遠藤湖舟氏の作品「昇る金星」をベースに作ったものです。最初にこの写真を見た時の「暗黒の空に輝く金星が、逃げ出したくなるほどの重責で苦しんでいるときに、ふと差してくる一筋の光と重なった」思いは変わらず、大きな東京フォーラムの会場で、やっと日の目を見てひるがえる姿に、私の心も揺れました。

写真1

実質上の学会初日の3月22日朝早くホールに行くとすでに多くの人が来場されていて、自分で主催した学会に人が集まってくれているという実感と長くコロナで対面の学会ができなかったことも思い出され、安堵感と共に、とても嬉しく感じました。事前にネームカードを配布したこともあり、受付での混乱もなく、用意した江戸と現代の皇居周辺の絵と博多織をあしらったコンゴレスバッグも評判が良いようでした。

学会の色を出すシンポジウムやワークショップは、スタッフたちが発案したものを学会スケジュールが許す限り、全て詰め込みました。3/22金曜朝のオープニングシンポジウムは、「がんゲノム時代の造血細胞移植」と題し、旧友である九大赤司浩一教授と尊敬する京大小川誠司教授に座長をお願いしました。移植医を常に悩ませる移植適応について日本医大山口博樹教授が多数の症例のデータを元にきれいなデータを披露いただき、長くこの世界でゲノム解析に従事されてきた東大医科研の南谷泰仁教授やアメリカで活躍している旧友でもある峯石真先生と虎の門で一緒に仕事した高橋康一先生のご講演も興味深く聴かせていただきました。

また3/22金曜PMは、日本が世界に誇る臍帯血移植を取り上げ、長く世界の臍帯血移植をリードしてきたJohn Wagner教授、中国の臍帯血バンク事業に従事されてきた北京大学Liu Kaiyan教授と共に、日本の臍帯血移植の二大巨頭とも言える東大医科研の小沼貴晶先生と虎の門病院の内田直之先生に登壇いただきました。また近年世界的に嵐が吹いているハプロ移植の現状を日本のPTCYのリーダーである北大の杉田純一先生と中国の一人っ子政策によりハプロ移植に昔から圧倒的な症例数で取り組んでこられた北京大学Xiao-Jun Huang教授にご登壇いただきました。翌3/23土曜AMは大きく変わりつつあるGVHDについてそのメカニズムから新しい診断と治療方法について4人の日本のエキスパートの先生方に話していただきました。また今年は日本で同種移植が始まってちょうど半世紀とのことで、これを記念するシンポジウムを金沢大学宮本敏浩教授と名古屋大学におられた滋賀医大村田誠教授に座長をお願いし、日本の移植を創成期から支えてこられた小寺良尚先生と原田実根先生にもご登壇いただきました。また移植医療は患者もスタッフも長く厳しい戦いが強いられ、地域によってはスタッフの確保や教育、また患者の確保にも苦労されています。その中で工夫しながら地域の移植医療に貢献しておられる富山、沖縄、福島会津、福島市の先生方に、「日本における造血幹細胞移植の普及-地方からの逆襲」というタイトルのシンポジウムにそれぞれの地域でのご経験を話していただきました。第2会場（600人収容）の看護部門も、充実の企画満載の企画で、多数の看護師さんに参加いただきました。また第3-6会場まで使って、LTFU、口腔ケア、リエゾンチーム、リハビリテーションなどのチーム医療を広く取り扱ったワークショップを多数企画し、多くの部屋が満員で立ち見まででたと聞いております。

市民公開講座も、「がんと暮らし」に焦点を当てた第一部では、4人のエキスパートの方々に、のどを鍛える、仕事、性生活、アピアランスをテーマにお話しいただき、初めて聞く話も多く勉強になりました。元NHKの宮本隆二アナウンサーの芸達者ぶりにも驚きました。第二部では、2023年には白血病や移植をテーマとした映画が二つ誕生しましたが、その作者であるお二人（堀ともこさんと樋口大悟さん）に「映画にかけた想い」と題してご登壇いただき、闘病や骨髄バンクのことなどの想いを語っていただきました。進行役は再び、宮本隆治さんが快く引き受けてくださり、お二人の話を上手に引き出してくださいました。

特別企画として、東日本大震災以来のお付き合いの東京新聞片山夏子記者に講演をお願いしました。片山氏は、2011年の原発事故以来福島の原発作業員や避難した人々を今でもまだ福島に住んで取材しておられます。その長期にわたる粘り強い取材を記した著書『ふくしま原発作業員日誌　イチエフの真実　9年間の記録』は講談社本田靖春ノンフィクション賞や石橋湛山

記念早稲田ジャーナリズム大賞も受賞され、高く評価されています。双方とも、作品のテーマは勿論、取材の緻密さ、文章の確かさが問われる受賞です。今回は、福島の長期にわたる取材や今回の能登地震にも足を運び、主に写真を中心に被災者の現状と苦悩を話していただきました。

3/22夕刻には前回も予定しておりましたが、ホールC（第一会場）で世界的バイオリニストの前橋汀子さんが演奏していただきました。アンコールまで応えていただき、かつ進行はやはり宮本隆治さんが引き受けてくださり、ただただ感謝でした（写真2）。前橋さんの演奏を聴きながら、学会2日目が無事に終了しつつあることの安堵感からか、彼女の演奏の特性か、妙に涙が出てくるような演奏で、感銘いたしました。

写真2

3/21木曜日初日夜の評議員懇親会には100人を超える参加者をホテルオークラに迎え、日本医学会会長の虎の門病院長門脇孝先生もご来場、ご挨拶をいただきました。3/22金曜日の会員懇親会では、第2、第3会場をつないだとても広い会場で実施しましたが、会場いっぱいに参加していただき、用意した私の出身である鹿児島の焼酎や福岡の日本酒などもすぐになくなるほどの盛況でした。会の進行もまた宮本アナウンサーが担当していただき、虎の門と浜の町が用意した動画のできも評判良く、虎の門西田彩医長が企画したマジックショーで宴のピークを迎えました（写真3）。

写真3

少し緊張して迎えた学会でしたが、あっという間に3日間過ぎました。2019年から足掛け5年間に渡り、企画を考えてきた学会でしたが、自分たちの人智なるものはそれほど重要ではなく、結局は最終的に参加していただいた3684名の方々の結集した力で、無事に終了することができました。ご尽力いただいた全ての方々に感謝して学会開催の報告といたします。

2024学会年度　社員総会・評議員会　承認・決定事項等のお知らせ

2024学会年度第1回定時理事会および2024学会年度定時社員総会（いずれも3月21日開催）において承認・決定されました事項（一部、上記以前の理事会にて承認された事項含む）をお知らせいたします。

Ⅰ．事業並びに会計について

2023学会年度事業報告並びに会計決算案、2024学会年度事業計画並びに会計予算案について審議され、決定・承認されました。

≪決定・承認された会計決算案および会計予算案≫

一般会計：2023学会年度決算案、2024学会年度予算案

特別会計：2023学会年度決算案、2024学会年度予算案

- 造血幹細胞（骨髄・末梢血・臍帯血、自家・血縁・非血縁）移植症例一元化登録フォローアップ／データ解析・利用事業
- 造血幹細胞ドナー（血縁・非血縁の骨髄、末梢血）採取事例一元登録フォローアップ／データ解析・利用事業
- 臨床研究推進事業
- 認定医制度事業
- 看護師研修事業
- 人材育成事業
- 第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会（決算案）
- 第47回日本造血・免疫細胞療法学会総会（予算案）

Ⅱ．役員、新評議員等の選任について

2024学会年度からの役員、新評議員（社員）等として、以下の方々が 選任されました（以下、全て敬称略、順不同）。

1. 理事長・副理事長：
   豊嶋崇徳（理事長）、高橋　聡（副理事長）、福田隆浩（副理事長）
2. 理事（改選10名）：
   ［内　科］内田直之、緒方正男、諫田淳也、神田善伸、豊嶋崇徳、福田隆浩
   ［小児科］佐野秀樹、高橋義行
   ［基　礎］熱田由子
   ［看護部］山花令子
3. 監事（改選2名）：
   長藤宏司、西田徹也
4. 新評議員（31名）：
   ［医　師］稲垣裕一郎、神尾卓哉、河北敏郎、久保田寧、栗山拓郎、後藤秀樹、佐藤一也、白鳥聡一、陳之内文昭、田上　晋、徳永雅仁、豊﨑誠子、永田安伸、錦井秀和、西田　彩、西森久和、葉名尻良、日野もえ子、平松英文、福島庸晃、藤崎弘之、保仙直毅、細川晃平、町田真一郎、頼　晋也

［看護師］神田　舞
［HCTC］飯崎淑恵、小瀧美加、山﨑奈美恵
［薬剤師］伊藤忠明
［理学療法士］濱田涼太

5. 次々期総会会長（令和９年・第49回学会総会）：
矢野真吾（東京慈恵会医科大学　腫瘍・血液内科）

6. 新功労会員：
臼杵憲祐、三谷絹子、森尾友宏、森内幸美、高梨美乃子、石川隆之、千葉　滋、松村　到、今村　豊、北折健次郎、今城健二、牧野茂義、森　茂久、小阪嘉之

※各種委員会の新委員長・新委員については、現在、手続き中の委員会もあるため、次号に掲載いたします。

Ⅲ．表彰等について

≪造血細胞移植功労賞（敬称略、順不同、所属は受賞時）≫
［医　師］坂巻　壽　（がん・感染症センター都立駒込病院　名誉院長）
［医師でない者］田中重勝　（全国骨髄バンク推進連絡協議会　副会長）

≪日本造血・免疫細胞療法学会学会賞（敬称略、所属は受賞時）≫
福田隆浩　（国立がん研究センター中央病院　造血幹細胞移植科）

≪第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会奨励賞（敬称略、順不同、所属は受賞時）≫
蒔田真一　（国立がん研究センター中央病院　血液腫瘍科）
三田和広　（大阪国際がんセンター　血液内科）
山本隆介　（神戸市立医療センター中央市民病院　血液内科）
丹羽香央里（三重大学大学院医学系研究科　小児科）
坂田　友　（九州がんセンター　看護部）
市川真未　（市立函館病院　6階東病棟）

≪2023年度 JSTCT Working Group Research Award（敬称略、順不同、所属は受賞時）≫
賀古真一　（自治医科大学附属さいたま医療センター　血液科）
宮本智史　（東京医科歯科大学病院　小児科）
井上明威　（熊本大学病院　血液内科）
今橋伸彦　（独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター　血液内科）

≪JSTCT2023若手優秀研究賞（敬称略、順不同、所属は受賞時）≫
渡部まりか（甲南医療センター　腫瘍・血液内科）
寺尾俊紀　（岡山大学病院　血液腫瘍内科）
濱田涼太　（京都大学医学部附属病院　リハビリテーション部）
津島隆史　（成田赤十字病院　血液腫瘍科）
新家裕朗　（福井大学医学部附属病院　血液・腫瘍内科）
黒澤修兵　（横浜市立市民病院　血液内科）

≪HCT Contribution Award 2023（敬称略、順不同、所属は受賞時）≫
▼拠点病院および公募による推薦からの受賞者
安斎　紀　（公立大学法人福島県立医科大学附属病院　患者サポートセンター）

金本美代子（がん・感染症センター都立駒込病院　血液内科）
二木寿子　（国家公務員共済組合連合会浜の町病院　歯科）
川口真理子（兵庫医科大学病院　看護部）
土井久容　（神戸大学医学部附属病院　看護部　腫瘍センター）
山邊裕子　（岡山造血細胞移植患者会きぼう）
横田宜子　（原三信病院　血液内科）
上江洲富夫（沖縄県骨髄バンクを支援する会）
▼第45回総会コーディネート関連演題発表者からの受賞者
山花令子　（武蔵野大学　人間科学部人間科学科看護コース）
長谷川尚子（東京都立駒込病院　患者サポートセンター）

Ⅳ．次回学術集会

≪令和７年度・第47回日本造血・免疫細胞療法学会総会≫

総会会長：日野雅之　（大阪公立大学大学院医学研究科　血液腫瘍制御学）
会　　期：2025年2月27日（木）・28日（金）・3月1日（土）
会　　場：グランキューブ大阪（大阪府立国際会議場）

ワーキンググループ　新規メンバー募集のお知らせ／二次調査実施のお知らせとお願い

造血細胞移植登録一元管理委員会

ワーキンググループ（WG）　新規メンバー募集のお知らせ

今年もワーキンググループの新規メンバーを募集いたします。奮ってご参加ください。

なお、メンバーには資格条件がありますので、日本造血・免疫細胞療法学会ホームページの「ワーキンググループ（WG）」ページより「造血細胞移植登録一元管理委員会が設置するワーキンググループ運営に関する細則」・「WG新規メンバー公募案内」をご確認ください。

現在参加中のワーキンググループの異動を希望される場合は、学会ホームページの同ページ内「WG異動申請案内」をご確認の上、申請をしてください。

【WG新規メンバー応募方法】

日本造血・免疫細胞療法学会ホームページより申請フォームにて応募

- 申込期限　　2024年5月31日（金）締切

【WG異動申請方法】

異動申請書を日本造血細胞移植データセンター宛てにメールにて送付

- 申込期限　　2024年5月31日（金）締切
- E mail 送信先　　jdchct-dc@jdchct.or.jp

※書類に不備がある場合には、申請を受理できない場合があります。

二次調査実施のお知らせとご協力のお願い

2024年3月2日（土）にプレゼン審査を実施し、一元管理委員会で承認された二次調査研究につきまして、日本造血細胞移植データセンター（JDCHCT）が代行で二次調査を実施します。対象施設となった際は、ご協力をお願い申し上げます。（2024年度実施：2研究）

****

◎ WG12　再生不良性貧血【成人】

『劇症型再生不良性貧血に対する同種造血幹細胞移植』

山口大学医学部附属病院　　中邑　幸伸

◎ WG20　GVHD以外の移植関連合併症

『同種造血幹細胞移植後の非感染性脳炎・脳症に関する研究』

大阪公立大学医学部附属病院　　仲子　聡一郎

****

2024年度二次調査研究の実施に加えて、2023年度二次調査研究が一括倫理審査の導入により、二次調査を開始するまでの期間が延長している影響で、その調査が2024年度実施となること、他に研究者主導研究、産学協同研究にて二次調査を要する研究が複数計画されていることから、調査に参加されるご施設の負担とJDCHCTでの調査実施のキャパシティを考慮し、次年度の二次調査プレゼンに関しては開催を1年間見送ることといたしました。

JSTCTが“支援”する臨床研究のご紹介

【研究タイトル】

Insertion/Deletionマーカーを用いた新規キメリズム解析法の確立

造血細胞移植後、ドナー生着確認のための、デジタルPCRを用いたキメリズム検査を行い、迅速に結果報告いたします。

【研究の趣旨】

造血細胞移植後、レシピエント体内におけるドナー細胞の定着を確認する検査法として、キメリズム検査を行うことが一般的です。レシピエントとドナーが異性間の場合、XY-FISH法でキメリズム検査を行うことができますが、同性間の場合はSTR-PCR法といったDNA個人識別マーカーに頼る手法を選択する必要があります。しかしながら、STR-PCR法は検出感度が十分に高いとはいえず、より感度の高い検出法が求められています。

私どものグループはこれまで、より検出感度が高いと期待されるInDelマーカーを活用したデジタルPCRベースの検出法を探索してきました。本試験では、日本人の出現率を考慮して選択した28個のInDelマーカーをマルチ検出するタイピングアッセイと、デジタルPCRベースの高感度なキメラ検出アッセイからなる新しいキメリズム検出技術の有効性を検証します。

本研究は大阪大学医学部附属病院観察研究等倫理審査委員会での承認を受けております。ご参加いただいた施設より当院での一括倫理審査を行い、実施許可の申請をお願いすることとなります。詳細につきましては、下記にご連絡いただけますと幸いです。

ご協力いただけます先生方のご参加をお待ちしております。

【目標症例数】

100例

【症例登録期間】

2024年4月～2025年3月

【研究代表者】 大阪大学大学院医学系研究科　福島　健太郎
〒565-0871　大阪府吹田市山田丘2-2-C9
e-mail: kfukushi@bldon.med.osaka-u.ac.jp
Phone: 06（6879）3871

看護部会企画

第46回日本造血・免疫細胞療法学会総会を終えて

犬童　千恵子（国家公務員共済組合連合会　虎の門病院　看護部）
森　美都子　（国家公務員共済組合連合会　浜の町病院　看護部）

第46回日本造血・免疫細胞療法学会総会を2024年3月21日～23日に東京国際フォーラムにて開催しました。2020年3月に予定していた幻の第42回学会総会から4年の時を経て、再び谷口修一先生を中心に浜虎合同チームで準備・開催できたことが本当に幸せでした。

看護シンポジウムでは、「生きたいに応える責任～今、再び問う～」という総会のテーマに沿って高齢者の移植看護についてご講演いただきました。教育講演では、CAR-T療法の最新情報と看護について、患者さんの心理状態をあらわすデモラリゼーションをテーマとしたセッションを企画しました。また、患者さんがより患者さんらしく生きていくために必要な長期フォローアップや多職種連携に注目し、トランジション、LTFUの病院間連携、HCTCと看護師の連携をテーマとしたセッションも企画しました。どのセッションからも臨床ですぐに役立つ気づきや知識を得ることができたのではないでしょうか。一方、登録演題が少なく看護一般口演は10演題となりました。今後は、本学会総会で看護を科学的な視点でまとめ発表する看護師が増えることを期待したいと思います。

最終日には看護グループミーティングが行われました。「LTFU成人」「症状マネジメント」「LTFU小児」「移行期支援」「教育・管理」の5つのテーマに分かれ情報交換を目的としたグループワークを企画し、総勢81名の方々にご参加いただき、対面での有意義な交流ができたと思います。看護グループミーティングの運営に関しましては、全国の造血幹細胞移植推進拠点病院の方や学会看護部会の委員、合わせて約35名の方々にファシリテーターとしてご協力いただき、例年にない多くの参加者と学びを深める機会を設けることができました。本当にありがとうありがとうございました。

また、プログラムの企画以外にもお弁当や軽食、ノベルティ、懇親会の準備も経験させていただき、随所に福岡らしさと東京らしさ、チーム谷口さしさが出せるように意識してみました。第46回日本造血・免疫細胞療法学会総会が少しでも記憶に残るものになっていたら嬉しいです。

最後にあらためまして、ご参加いただいた方々、ご支援いただいた方々にこの場を借りて心より感謝申し上げます。同じ領域の医療に携わる多職種が集合し、共に学び議論することの意味を強く感じることができた貴重な時間となりました。次回、大阪で行われる第47回日本造血・免疫細胞療法学会総会でもより多くの方々と笑顔でお会いできることを楽しみにしております。

私の選んだ重要論文

Jad Othman, Nicola Potter, Adam Ivey, et al. Post induction molecular MRD identifies patients with NPM1 AML who benefit from allogeneic transplant in first remission. Blood. 2024 Feb 16:blood.2023023096.
doi: 10.1182/blood.2023023096. Online ahead of print.

Nucleophosmin member1（*NPM1*）変異陽性の急性骨髄性白血病（AML）患者に対して、第一寛解期（CR1）での同種造血幹細胞移植を行うかどうかは依然として悩ましい。過去には、high allele ratioの*FMS-like tyrosine kinase 3-internal tandem duplication*（*FLT3-ITD*）変異陽性を併存している患者群でのみ全生存期間（OS）が改善するという報告もあったが、近年、微小残存病変（MRD）解析に基づいた予後データが集積されてきた。昨年の米国血液学会で、*NPM1*変異陽性のAML患者においてCR1での同種造血幹細胞移植が有効な患者群を、MRD解析を用いて明らかにしようとした研究が報告されたので、今回はその論文を紹介する。

本研究は、イギリスのNational Cancer Research Instituteで実施された無作為化前向き試験であるAML17とAML19のデータを統合し、新規AMLと診断された移植適応齢の患者において、寛解導入療法2コース後に完全寛解（CR）を達成でき、末梢血でMRD解析（RT-qPCRで測定）を行ったNPM1変異陽性AML患者737人を対象とした。このうちMRDが陽性だったのは19%で、MRD陽性患者の46%、MRD陰性患者の17%で同種造血幹細胞移植が行われた。MRD陽性患者では移植群の方が非移植群に比べて3年OSは優れていた（61% vs 24%, HR 0.39, 95%CI 0.24-0.64, p<0.001）。しかしMRD陰性患者では移植群と非移植群のOSに有意差は認められなかった（79% vs 82%, HR 0.82, 95%CI 0.50-1.33, p=0.4）。3年無再発生存期間（RFS）はMRD陽性患者では移植群の方が良好で（50% vs 13%, HR 0.44, 95%CI 0.27-0.72）、MRD陰性患者でも同様であった（76% vs 62%, HR 0.50, 95%CI 0.32-0.79）。また*FLT3*-ITD変異を併存する患者に限定した解析でも同じ傾向が示され、MRD陽性患者では移植群の方がOSは良好で（45% vs 18%, HR 0.52, 95%CI 0.29-0.93）、MRD陰性患者では移植群と非移植群に有意差は認められなかった（82% vs 76%, HR 0.80, 95%CI 0.37-1.72）。

この研究が示しているように、経時的なMRD解析は今後実臨床において不可欠なものとなっていくと考えられる。*NPM1*のみならず*FLT3*-ITDなども含めたMRD解析が広く臨床で行われるようになれば、その結果に基づいた移植適応、最適な移植時期の同定だけでなく、移植後維持療法を行うべき患者群やその開始に適したタイミングにまで応用が可能となり、移植成績のさらなる向上が望めるのではないだろうか。

日本医科大学　血液内科学　　福永　景子、山口　博樹

施設紹介　神戸市立医療センター中央市民病院　血液内科

近藤　忠一

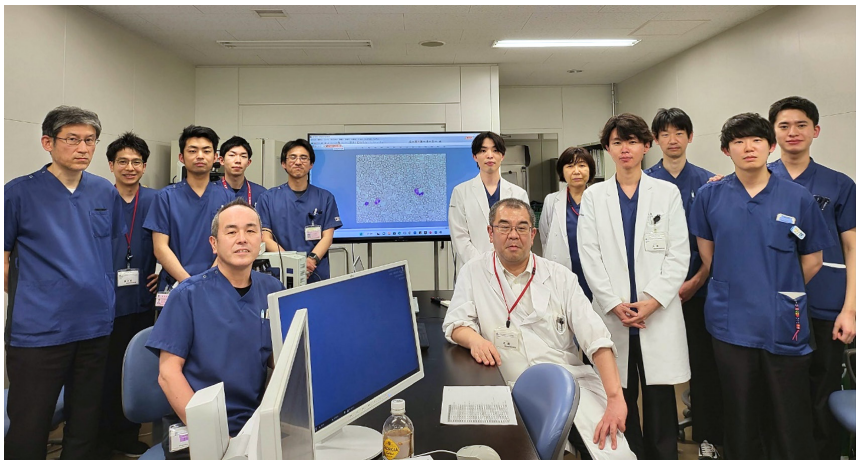
当院は、開港150年を迎えた神戸港、ポートアイランドに位置する病床数768床、30を超える診療科を有する高度急性期病院です。令和6年に開設100周年を迎えます。「神戸医療産業都市構想」の中核病院として、神戸市域の、救急医療・高度医療・急性期医療を担っています。特徴として、「断らない救急」の理念があり、厚生労働省の「全国救命救急センター評価」で2024年時点で10年連続全国1位の評価を受けています。

血液内科は、先端医療センター病院とこれまで診療、病床利用について一体運用してきましたが、2017年に統合し、より安定した診療体制を構築できることになりました。また、長らく当科を統率されてきた石川隆之先生から近藤忠一に2024年4月に部長が交代となりました。

同種移植は1986年から開始し、年間40～50件の移植件数（自家移植を含む）であり、臍帯血移植、PTCyハプロ移植にも積極的に取り組んでおり、ハイリスク症例、高齢者症例も多く、他院からの紹介症例も増加しています。病棟は、無菌室3室、準無菌室 10室および一般病棟で構成され、スタッフ医師8名、専攻医7名が2つのチームを構成し、診療にあたっています。毎週開催される多職種合同移植カンファレンスでは、血液内科医師、病棟看護師、薬剤師、HCTC、栄養士、理学療法士等が参加し、積極的に意見交換を行い、チームとして情報、治療方針を共有し、個々の患者さんへ最適な移植医療を提供できるように努めています。検査部は、フローサイトメトリー、キメリズム解析の他、遺伝子検査を迅速に行っていただける特徴があり、移植医療を支えていただいております。

CAR-T細胞療法は2019年3月より保険承認されましたが、厳密な細胞管理体制が求められるため、CAR-T治療は限られた施設でのみ認可されています（現在、兵庫県内では当院と兵庫医科大学病院の2施設）。当院では早期導入を目指し、薬剤部・輸血検査管理室・細胞遺伝子検査室・臨床工学技術部と連携して運用体制を構築した結果、市中病院としてはかなり早く、2020年11月に施設認定されました。他院からCAR-T療法を希望される症例も積極的に当院で治療をお引き受けさせていただいております。また、治験や臨床試験にも積極的に取り組んでおり、難治性の症例にも対応しております。

今後も、チーム医療を更に邁進し、チーム一丸となり、一人一人の患者さんに寄り添い、“For the patient（すべては患者さんのために）”の信念の下、質の高い移植医療を提供できるよう精進していきますので、これからも皆様のご指導・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。



会員の声

大分で繋いでいきたい。心で感じる血液診療

大分大学医学部附属病院　血液内科／輸血部　　高野　久仁子

『入局者を増やしたい』、『どうしたら血内の魅力を伝えられるだろう…』。気づけば男児2人の母となり、大学の中堅となり、勧誘活動に奔走する立場となった私だが、そもそも自分が「なぜこの科を選び、ここまで歩んできたのか」、今回の執筆依頼を受け、改めて自分の歩みを振り返る機会を頂いた。私は、医師としてのキャリアを大分県立病院という地域の中核病院でスタートした。宮崎泰彦先生、大塚英一先生、佐分利能生先生、三者三様の熱血漢の上司の背中から、こんな医者になりたいと憧れた。忘れられない出会いも多く、特に小さなお子さんがいるA子さんは、冗談ばかりの豪快で、とにかく温かい人だった。AML移植後再発が判明したのはクリスマスの日だった。お子さんを想い流涙する彼女に、研修医の私は傾聴しかできなかった。励ますつもりが最後はいつも笑わかされ、逆に私が励まされていた。そんな彼女が無事、臍帯血移植を行い、漸く生着という日。普段通り訪室すると、私の名前、移植をしたという事実すら忘れていた。夜、痙攣、ICU入室、多臓器不全が進行し亡くなった。あっという間だった。医師になり初めての死亡確認は、泣いて声にならなかった。頭部MRIでの辺縁系脳炎の所見と血漿HHV-6 DNAの著高を認め、初めて「移植後HHV-6脳炎」の存在を知り、それが現上司、緒方正男先生の研究テーマだと伺った。これほど悲惨な移植後合併症があることに茫然とし、生前彼女からの「血内に入れば」の言葉に背中を押され、この道を選んだ。大分大学入局後、緒方先生がHHV-6脳炎について次々と臨床研究を行われる側で学び、国立がん研究センター中央病院への留学の機会も頂いた。福田隆浩先生と緒方先生が、ホスカルネットの保険承認に向け奮闘される姿を間近で見、承認が得られた時の感動は忘れられない。「移植後HHV-6脳炎の重症化に関わる髄液サイトカインの動態」を博士論文として纏め、JSTCTのガイドライン作成にも微力ながら携われた。これまで15年、何度となく移植医療の辛い現実と育児の両立に限界を感じ、心が折れそうなる度、A子さんや患者さん達の顔が浮かび、上司、同僚、家族の支えと、やはり血液診療が好きで続けられている。

勧誘の話に戻るが、ここ数年のコロナ禍で学生を患者さんから遠ざけざるを得なかった。ただ、患者さんとの出会いこそが医師として心の原動力、拠り所でもあるわが身を振り返ると、改めて若い先生には、患者さんと対峙し、心が動かされるような経験をして欲しいと願う。現在当科は、CAR-T細胞療法にも積極的に力を注いでいる。学生や研修医にこうした新たな治療、血液診療の魅力を伝えるとともに、対「人」を大切にした実習の機会を増やしていきたい。患者さんのために熱い想いを持つ後輩が、一人また一人と増え、団結して大分の血液診療をカバーし合う、そんな素晴らしい医局にパワーアップしていくことを夢に見、今は人不足で悲鳴をあげている地方大学の一医局員の妄想は膨らむばかりである。（温泉の他にも魅力満載の大分で働いてみたいという先生がおられましたら、お声がけ下さい。お待ちしております。）

次号予告　次回は、神戸大学医学部附属病院　腫瘍・血液内科　薬師神　公和 先生です！

一般社団法人　日本造血・免疫細胞療法学会　事務局
名古屋市西区那古野二丁目23-21-7d号（〒451-0042）
Tel: 052-766-7127　Fax: 052-766-7137　E-mail: jstct_office@jstct.or.jp　https://www.jstct.or.jp/